

立って考えてみたいものである。

苦難の日に学ぶ

東京都 土屋 セツ子

国家総動員令が出て、退職が許されず、たつて望むならば、懲戒免官を覚悟で、退職願を提出するようにとの校長の言葉に驚き、退職を断念し、急遽、大きな防空壕を構築して、お手伝いさんと、あわてて九州から呼び寄せた夫の姪に、八歳を頭に一歳までの幼児を託して勤務していた。幼児の一人が、防空壕内で失神したとの電話で飛んで帰ったこともあった。続いて、幼児家庭強制疎開令が出たので、お手伝いさんを家に帰し、姪と四児を三峽という山里に疎開させた。依然として退職は許されないのです、毎朝、未明に起きて家事を終え、台車発着所に駆けつけ、一人の青年の押す台車にひとり乗って、溪谷にかかる鉄線橋を飛ぶように渡り、鶯歌の町に、そして、台北にと往復四時間もの通勤をした。鉄線橋を飛

ばす時は、万一のことまで覚悟した。四か月ほどすると、校長が、戦況が少し落ちつくまで休むようにおっしゃって下さったので、しばらく休ませていただいた。決死の通勤はしないですんだが、試験はいよいよ厳しく、三女佳子を失ってしまったのであった。

疎開先の家、陳家の主婦のおかげで、食事也十分でみな元気であったのに、佳子の元気がないので、気がつき、すぐ疎開病院で診ていただくと、先生は用心のためと輸血をされた。五時間ほどして、又、先生は、前より多い目に輸血をされた。すると、急に苦しみ出し、寝ずの看護も空しく翌日のお昼過ぎに亡くなってしまった。せめてもの慰めは、亡くなる時の姿で、ようすが少し落ちつきほっとしていると、急にかわいらしい声で、歌を歌い、しばらくして歌をやめ、小さい右手の人さし指で天井をさし、嬉しそうな顔をしたので私は治ったのかと思ひ、院長室にお知らせに上がろうとすると、佳子は手を下げ同時に、目を閉じてしまった。私は佳子の手をひいて連れて行かれた方の姿を想像して悲しみに堪えたのであった。五十日して終戦、帰北、かかりつけの先生にお伝え

すると、一言もなく、首を振って涙ぐまれた。

勤務校は接収され、疎開地にしたので、先生方や教えずと一言の別れの言葉も交わすことなく、永のお別れとなっていました。特に文科系の教師は即時、解職とのことで、私も、国語科の担任であったので、即時解職になったことは確実で、これは敗戦の悲劇と諦めたが、国家総動員令によって退職ができず、幼児家庭強制疎開令によって台北を離れ、十六年間も若き日の情熱を傾けた教職との袂別の日が明確でないことが悲しまれる。

仏印駐在の夫の消息も、仏印から台湾高雄に転任された中国軍の将校の方から、夫の手紙同封の懇切な書状をいただくまで不明であり、引き揚げは数年後とのデマも飛び交う中で苦しい日々を送った。

このようなある日、一人の教え子が来訪、紙包みをさし出し、ていねいに挨拶していそいで帰ってしまった。その紙包みには、たくさんのお金が入っていたので、私は、驚いて、その紙包を持って学校に飛んでいった。中国人の立派な先生にお目にかかって、事情を申し上げると、先生は流暢な日本語で、「このことは、私も十分、承知

しています。貴女が急に退職され御主人も南方にいらっしゃることを知った生徒が、御案じして、父兄と相談の上、お贈りしたものですから、心配なくお受け取りください。」とおっしゃってくださったので、私は、深く頭を下げて感無量の思いでお暇をした。

又、ある日、見知らぬ中年の男性の来訪を受けた。その方は、引き揚げまでの生活の手段として全省を行商をした時、どの省に行っても台北からという何人かの人に、貴女のことを尋ねられた。貴女は生徒さんを教えられただけでなく、たとえば、学費の援助をなさるとか、特別な世話をなさったのですかと、問われたので、台北第三高女は、領有間もなく、台湾全省から教育に理解のある旧家の子女を選抜して、将来の台湾のために貢献できる人物の養成を目標として、台湾総督府の直属の高女学校として創立された学校で、卒業生は五十人余りで、家庭、社会への貢献度も高く、師範科修了生の中には、教職歴数十年という人もあり、卒業生の愛校心の強いこと、師弟愛の深いことなどお話すると、深く肯いてきてくださった。私への愛情は留守家族への思いやりでしょ

う。又、私は国語の教師でしたので、つい、時間を捻出しては、源氏物語や万葉の講義などしたので、あるいは日本文化への憧れのようなものもあつたかも知れません。私は、年も若く至らない教師でお恥ずかしい次第です。感謝だけは心からさせていただきますと申し上げると、疑問が解けましたとお礼を述べて辞去された。

私はこれらがあつて、苦難の日々を送る私を見えない所で支えてくださる方々に安心していただかなくてはならないと、引き揚げが何年先になつても心配のない収入の道を計る決意をした。昭和十三年、夫が仏印に発つ少し前に、友人が鉛筆製造の東京工場を台湾に疎開することになつた時、夫が、土地その他について協力し、喜ばれたことを思い出して、さっそく工場を訪問し、工場長に御協力をお願いしたところ、即座に承諾されたので、その足で、全島に読者を持つ台湾日々新報社を訪ね、鉛筆卸し売り開業の広告の掲載の依頼をした。広告料の高いことにちよつとびびくりしたが、ためらわず支払つて帰宅した。

仕入れは、現金としてグロス単位で包装された大きな

包みを玄関に積んで客を待つ。当時鉛筆は、軍用優先の影響で、極度に品不足であつたのと、広告の力は偉大で、客は、つぎつぎと見えた。

ある時、台湾人の台湾大学の学生さんの案内で見た方が、たくさん仕入れてくださったので、乳母車に積んで、台北駅までお届けした。道々お二人のお話で、お客様は、学生さんの国民学校時代の校長先生であられ、鉛筆のことを新聞で知つて、引き揚げまでの支えにしようと決心され、台南からむかしの教え子を頼つておいでになつたことがわかつた。私は、お二人の師弟愛溢れる美しいお話に感激し、少年の口に慈しまれた老恩師を思う青年の純情に胸打たれ、勇氣百倍、この商売に全力をつくそうと決心を新たにしたのであつた。

しかし、間もなく、留守家族は第一船で引き揚げさせるといふ発表があつた。即刻、申しこみ、家の整理等の時間はなく、ちよつと買物にゆくような状態で引き揚げ船の人となつた。今でも、思い出すのは、その時の幼児の背の小さいリュックの中は、絵本と人形等であつたこととで、春になれば百合の花咲く払い下げを受けた美しい

山や本屋だったかと怪しまれた何千冊もの書物などは、あまり浮かばないで、床の間に立てかけてあった夫の愛用のマンドリンであったりする。そして、時には、平和な日に聴いた優しい音色だったりする。

人は絶対絶命、生命の極限と思われるような時でも、心を占めるものは決して苦しいことや、悲しいことだけではなくて、むしろ、その苦難を乗り越えるために励ましとなる美しいものがあることを学んだことを肝に銘じて、よりよき生涯を生き抜きたいと念願してやまないのである。

蓬萊の島を後にして

東京都 藤 浦 ム ツ

主人は、昭和二十年三月二十五日に、（当時台北市南門国民学校六年女子組の担任教師で、三月二十日に卒業式を終え、高等女学校の入試発表前）台湾一三八七八部隊（私立開南工業、商業第五学年生）の学校隊の内務班

長として応召になった。配属将校や他の三班長と共に、三百人の生徒を引率して、台北の北西五キロにある五股国民学校を兵舎とし、主な任務は、陣地構築作業であった。

五月二十五日に、軍隊より一週間の公休が出たので、主人は、当番兵の陳友義二等兵（十八歳）と共に五股国民学校を下った。陳さんは、大稻程（だいたいとうてい）の豆腐屋の息子で、実家に帰った。主人が公休で山を下りるといっているので、私は学校にお願いして、溪州国民学校の疎開先から竜口町の実家で両親や妹たちと主人の帰りを待った。私は主人の入営後、子供がまだなくて一人身だったので、南門校の溪州疎開学園に疎開していた。

五月三十一日は、主人が休暇を終えて帰営する日であったが、昼頃からB29による台北大空襲があった。近くの台北一中に爆弾が落ち、火災を起こし、その煙が家の上空に広がって流れた。私は、家の裏庭の防空壕に父母や妹たちと主人と一緒に息をひそめて空襲の終わるのを待った。裏庭の水槽に台北一中の近くに落ちた爆弾の破片が飛んできて、真っ二つに割れて、中に入っていた金魚や魚がとび出した。